

# 節談説教の文化的研究\*

## A Cultural Study of the *Fushidan* Preaching

角 岡 賢 一  
KADOOKA Ken-Ichi

### ABSTRACT:

In this paper, the focus will be put on the Jodo-shinshu practice of preaching method of the *Fushidan*. The Buddhism way of preaching has been the long tradition on the one hand, and the origin of all the narrative arts such as Rakugo, Kodan, Manzai, Sekkyo-bushi and Gidayu-bushi. The narrative structure of the Buddhism preaching has been quite systematic in that the paragraphic structure is established: the Introduction of the doctrine — the Description — the Metaphor — the Affinity — the Conclusion. Another characteristic of the *Fushidan* preaching is the melodic narration, which is inherited to Gidayu-bushi among others. The mental feature of the *Fushidan* preaching is the religious ethos of the Buddhism tradition.

### KEYWORDS:

[節談] the *Fushidan* · [説教] preaching · [語り芸] narrative arts · [仏教] Buddhism

## 1. はじめに

この小論は2015年度財団法人本願寺派教学助成財団教学研究資金の助成に基づき、研究課題「節談説教の語り口について」取り纏めた成果である。本稿の目的は釈尊一代から日本仏教に伝えられた説教について語り口という観点を中心にして捉え、落語など日本の語り芸の源流となっている流れを位置付けることである。日本仏教の中でも、「節談」という形態を発展させて今日まで伝えている浄土真宗に焦点を当てていく。稿題で「文化的」と称しているのは、講談・落語・浪曲・義太夫節というような語りの諸芸能と説教の歴史的な関わりを探るという意味合いである。

出発点として節談の「定義」、あるいは節談がどのように捉えられてきたかという概観を試みる。以下は、関山師（2001：37）からの引用である。

節談説教とは、ことばに節（抑揚）をつけ、洗練された美声とゼスチャーをもって演技的な表出をとりながら、聴衆の感覚に訴える詩的、劇的な「情念の説教」をいうのである。（中略）「フシ」をつけて「談す」というところから出ている。古くは「節付説教」ともいったものである。

まずは「節」というのが、情念的な意味合いで聴き手の感情に訴えかける重要な要素であることを示唆しておく。教義を伝える内容と語り口、これを車の両輪に喩えるならば一方に相当するのが「節」という「飾り」—付加的要素であろう。ここで「洗練された美声、情念、演技的な表出」というように表現されているのは、関山師の主観を交えているように感じられる。しかし直林師（2010：7）の評価にもあるとおり、この説明は節談の特徴を端的に過不足なく言い尽くしているようである。「聴衆の感覚に訴える詩的、劇的な、、、」という文言も、文化史的な観点からの評価であろう。「洗練された美声」というのは、拡声器がなかった時代に広い本堂で隔々にまで声を届けねばならなかった時代の発声法について述べていると考えられる。そしてこの発声法を獲得するためには、連日大声を出して「声を破る、喉を潰す」という厳しい鍛錬を経なければならぬとされる流派もある。また「洗練された身振り」というのは、落語が「仕方嘶」とも称されて身振り手振りを伴う所作が重要視された成り立ちとも関連が深いと考えられる。他方の側面は言うまでもなく、信仰としての帰依である。話芸としての説教を仲立ちとして、聴聞者は深い法悦の境地に導かれるのである。後に説く「受け念仏」というのが、説教者と聴衆が一体化する法悦の境地を象徴するのである。

同じく関山師の言で、谷口師（2004）序に「監修のことば」として以下のように述べられている部分を引用する（2ページ）。

「節談説教」は、浄土真宗独自の説教用語であり、その正統伝承者でなければ絶対に真似の出来ない特異な布教法である。

ことばに節（抑揚）をつけて行う説教は、仏教伝来の時からわが国で行われたと思われるが、特に天台宗における安居院流と三井寺派の唱導が節付説教として繁栄し、前者の流れが真宗に入って飛躍的發展をとげた。「節談」という呼称は、真宗で近世後期に用いられるようになったもので、真宗が生産した固有名詞であり、他の宗派が真似をしてはならないものである。

ここで注目すべきは、真宗教団においても「節談」という呼び方が近世後期に成立したという見方がされていることである。つまりその時期までは「説教」と言えば節談のことであったから、他の説教様式と格段に区別する必要がなかったものであろう。また浄土真宗以外の宗派では「節付説教」という別の呼び方があり、起源や節回しなどあらゆる面で違いがあるであろう。この点について詳細に検証するには、別の機会に譲らねばならない。関山師ご自身は浄土宗の僧侶であるから、「他の宗派が真似をしてはならない」という主張は重みがあるであろう。「近世後期」という時代考証は、江戸時代後半を指すものと思われる。この時代考証についても、詳細は別の機会に譲る。

しかしながらここで言及されている安居院流と三井寺派の説教については、古く鎌倉時代に虎関師鍊（弘安元年（1278）生、正平元年（1346）寂）が『元亨釈書』において「説教者たちは高座の上で体や首を動かし、揺るがして、さまざまな型を示し、美声をもって歌いあげ、完全に話芸の徒となっていたのである」（関口師（2004：52））と批判していたのである。このような批判は東西両本願寺において直近の百五十年ほどで繰り広げられた節談「冷遇」と共通点があるのではないかと思われる。つまり節談の特徴である「情念に訴えかける」という側面を危険視したり「古くさい」と捉えたりする否定的な見方によって、一時は節談の伝統が途絶え

かけたという現実も直視しなければならないであろう。この十年余りでようやく、節談を見直すという機運が高まってきたのは、一つは説教があらゆる語り芸の源流であるという側面、いま一つは仏教の思想を広めるといふ教義の側面から意義があるものと考えるのである。「節談を見直す」といふ考え方については、谷口師（2004）の書名『「節談」はよみがえる』に端的に表されているであろう。2009年七月には築地別院で節談説教布教大会が開かれ、翌年には研究会による雑誌『節談説教』が創刊された。雑誌は以来、年に二回発行されている。

節談の語り口という観点から、釈師（2013：15～16）は関山師が「常日頃強調していた節談の特徴」を次のように紹介している。

「（日本語の特質を十分に生かした）七五調を基調にした表現」「独特の抑揚と節回し」「和讃・法語を巧みに導入」「節が語りに、語りが節に。美声によって展開される語り」「理屈ではなく情念に直結する説教」

これらのいずれも節談という布教手段、そして後に日本の語り芸へと繋がっていく特色をよく捉えて位置付けていると言えよう。以下の節では、これら節談の特色を客観的視点から跡づけていく。論点の中心に据えるのは「日本の語り芸諸芸が仏教の説教を源流とすること」、「説教の諸流派において最も注目すべき重きを成したのが浄土真宗の節談である」という二点である。

## 2. 節談構成の分析

本節では、節談の談話構造について言語学的見地から考察を行う。

関口師（2004）は説教の歴史について、「三輪説法」「十二部経」といふ方法と名称で釈尊一代が行った時代から説き起こされている。この時期における伽陀（<sup>ガク</sup>頌）、尼陀那（<sup>ニダナ</sup>因縁）、阿波陀那（<sup>アハダナ</sup>譬喩）という区分は、話芸的な傾向を示していると上掲書は指摘している（39ページ）。原始仏教においては経典等も未整備であったろうから、教祖たる釈尊の説教は教えを広める上で重要であったろうことは想像に難くない。また頌や因縁や譬喩という区分は、起承転結あるいは序破急などに繋がる話の展開という観点からも興味深い。このように説教の下地は内容と形式共に釈尊在世中にできており、時空を超えて節談にまで連綿と受け継がれつつ洗練されてきた経緯をこれから辿ってみる。

前節で示したように、浄土真宗に伝わった節談は中世期から他宗派の説教における形式などを受け継いでいる。直林師（2014：37）には阿久居流伝持の節談構成として「讃題・法説・譬喩・因縁・結弁（勸）」<sup>1</sup>という五段法が示されている。このように明確に確立された形式が整っているということは、節談が体系的に成り立ったという経緯を示していると言えよう。このように構成が明確であれば、新しく説教を考案する際においても大いに助けになることであろう。この五段法は浄土宗や浄土真宗にもそのまま伝わっている。

讃題は、節を付けて『浄土三部経』『御文章』『正信偈』『三帖和讃』などを読み上げる。これから説こうとする一席の説教において出発点となる一節である。一席の講話において重要なものが、この出だしであるとも言えよう。このように節を付けるのが「節談」といふ呼称の元になっているものであろう。法説は、その讃題を口語的に分かり易く説き明かす解説である。「ただいま讃題として採り上げましたは…」というような決まり文句で説き起こすのを常と

する。続く譬喩は、法説をより一層噛み砕いて語る例え話である。身近な例を引いて、聴聞者に引き寄せようとする段である。そして因縁において、もっと具体的に身近な例を引き讃題や法説の証明とする。ここは説教者の工夫次第で、聴聞者にも身近に感じてもらえるように面白おかしくもできる話が考案されたことであろう。この因縁話が後に落語などにおいて娯楽色が強くなったと考えられる。最後に結勸（結弁）として初めの讃題に戻って法義を説き、聴聞者に安心を与えるという構成になっている。いかにも耳から入る法談として、教義が分かり易く伝わるように工夫された形跡が覗える。

ここで実際に口演された節談を辿ることによって、五段法の構成を見ておきたい。直林師(2014)には神田唯憲師(明治三十二(1899)生、昭和五十九(1984)寂)が1955年に姫路の本徳寺で録音した節談が二席収録されている。【前席】と【後席】に分かれている。それぞれの構成は次のように解説が付けられている(同書111～112ページ)<sup>2</sup>。

【前席】	讃題	五濁悪世のわれらこそ 二首
	法説	(一) 本願正所被の義 (二) 唯信正因の義 (三) 心光照護のご利益 聴聞の所詮 【安心決定鈔】の文
	譬喩	【法華経】の結びを詠んだ和歌
	因縁	老夫婦の聴聞の話(土産待つ老人)
	結勸	ようこそ信じた妙好人の弁
【後席】	和歌	いやがるを袖ひきとめての歌
	譬喩	行水三千里の詩(切ない親心)
	法説	「疑えば迷うぞよ」
	因縁	河内の忠兵衛夫婦の疑問
	譬喩	皿に残る移り香(煩惱と定散心)
	弁	「沖のカモメ」の弁
	譬喩	川の深さを訪ねる旅人(弥陀成仏の意味)
	結勸	「たとい天は地となり」の弁

同書には、これら梗概だけではなく録音から文字化された全文も収録されている。貴重な記録である。前席は、讃題から結勸に至るまで定法通りの五段構成である。讃題は七・五が四句連なる和歌二首、続く法説はご開山聖人の思し召し三つとしてその意を解説している。譬喩は法華経終巻の「歓喜信受作礼而去」という御文の和歌で、因縁は「土産待つ老人」という話で前席の半分を占めるほどの長さである。前席全体の構成から見て、この因縁談に一席の比重を置いている意図が覗える。即ち、いつも説教を聴聞に出かける夫に替わって初めて説教を耳にした老婆であるが、土産話にどのような説教を聞いたかを語る事が出来ない。それを苦にして家を出ようとまで決意するという人情の機微を盛り込んだ因縁談である。

後席は讃題が和歌であり、譬喩が三箇所配されている。前席と比べると、五段構成が拡張されているかの観がする。更に構成を覗てみると、「沖の鷗」という「弁」の段が加えられて

いる。本文を参照すると「沖の鷗に潮時問えば、わたしゃ立つ鳥波に問え」というソーラン節の一節であった（上掲書142ページ）。このように民謡までも取り込んでしまうというのが節談の柔軟さであるという証左になるであろう。また考え抜かれた構成を辿ってみると、説教者の工夫が偲ばれる。上掲書では、「名人木村微量師の承継者」という副題を附して神田唯憲師の行跡を追っているが、唯憲師の布教口誌が残されていたが故に説教者が如何に努力したかという事実が明かされている。「前席、後席」という呼称は、落語「くっしゃみ講釈」で紹介されているような講釈寄席での出番を想起させる（「くっしゃみ講釈」の言語学的分析については角岡（2014）を参照されたい）。前席—後席というように一日の説教が勤まるについても系統立っているのは、落語や講釈という後世の語り芸に及ぼした影響の一つと言えるであろう。

このように数百年に及ぶ浄土真宗節談の積み重ねにおいて膨大な量の文献が残され、直近の半世紀については録音や画像も伝わっている。それらを体系的に伝えて調査していくことについては、節談説教研究会が中心的役割を果たしてきている。本稿での考察も、同研究会に多くを負っていることを附記しておく。

### 3. 節談語り口の分析

この節では、節談がどのような語り口で口演されたかということを追跡してみる。ここで語り口を辿ってみるによって、落語などの語り芸に繋がっていく道筋を辿ることができるであろう。

前節で提示した五段法においては、「はじめシンミリ（讃題・法説）、なかオカシク（譬喩・因縁）、おわりトオトク（結勸）」（関口師（2004：20））というように語り口が描写されている点が興味深い。「はじめシンミリ」は、説教が始まっても聴衆はざわざわとしているので、わざと声を落として騒々しさを鎮めようという意図もあったという。また譬喩と因縁における、滑稽さを強調する語り口が後に落語に受け継がれたという側面が大きいように思われる。この点について、詳細は次節において議論することとする。そして結論に相当する結弁では初めの讃題に戻って教義を諄々と説き、一席を締めるために荘厳な気分を盛り上げるという構成になっているように考えられる。

上述した五段のうち最初の讃題部と最後の結弁分は文語調で、格別に節を付けた独特な語り口である。時代がかった、大仰な調子である。これは同書附録の神田唯憲師の録音を聴いても明らかである。対して中間の三部は、平常の語り口に近い。落語の語り口と比べてみるというのはある意味で極端であるが——落語は名もない庶民が日常生活において他愛もない会話を交わすのが出発点である故に、強いて言えば中間三部に近いと言えよう。

また講談の語り口と比べても、共通点と相違点が観察されるように思われる。共通点としては、講談は落語と異なって日常会話の調子ではないという点が挙げられよう。落語は名もない市井の人物が他愛もない会話を交わすのに対して、講談は演者即ち講釈師が地語りで軍記物などを「読んで」いく。落語では演者が消えて登場人物になりきるのが理想とされるが、講談では講談師が語っているという態を通す。

節談における語り口については、上述の「初めしんみり」という伝授に加えて次のような和歌形式の格言も伝わっている（直林師（2010：8））。続く解説と共に引用する。

讃題に ついて離れて またついて 花の盛りに 置くが一番

これはまさに五段法の妙味を語った格言で「讃題について」というのが讃題と法説を指し、「離れて」というのが譬喩・因縁を指し、「またついて」が合法<sup>3</sup>を指します。どれだけ話を広げても、最後は合法して讃題に帰れということを言っているのです。最後の「花の盛りに置くが一番」というのは、話が下手なものほど、「ああも言いたいこうも言いたい」と、余計なことまで話してしまい、まとまりがつかなくなってしまうものだから、一番盛り上がったところで、終えるのが良いのだと、クライマックスに至ったら、くどくど語らずに終えてしまえと言っている訳です。

ここでは五段法という全体の構成だけではなく、実際に説教をする際の心得にまで説かれている。「讃題に付く」というのは、讃題に沿って解説を施す法説を特に指すのであろう。譬喩と因縁では笑いを盛り込むなどして堅苦しい話から多少の逸脱は構わないが、結句ではまた教義を説く方向に戻すようにという教訓がこの和歌であろう。讃題という教義に関わる柱を中心に据えながら、譬喩や因縁では聴聞する側に立って身近な話しに引き寄せ、最後にまた教義に戻るという構成は、釈尊存命当初から重ねられてきた工夫の跡を窺わせる。このように五段法という構成は、説教者が新しく台本を考える際に土台となるだけではなく、語る際にも指針を示しているということが覗える。

また府越師（2010：48）には、次のような口伝が紹介されている。

説教は田楽を作るが如くせよ	安心の豆腐に教学の串を打ち
譬喩・因縁の味噌を付け	弁舌の火で炙り
教学の串を抜いて食べさせよ	

説教を田楽に喩えた愉快な口伝である。口に入るべき最も重要な「具」は「安心」であり、それに「教学」という心棒を通す。譬喩と因縁は、説教者によって「味付け」を施されるのである。どのような説教に仕立てるかは、説教者の腕次第である。結句の「教学の串を抜いて」というのは、「過度に理屈で固めない」というほどの喩えであろうか。全体の構成から語り口に至るまで、説教の要諦を分かり易く示した伝承と言えるであろう。

## 4. 節談から語り芸への推移

この節では、節談から派生したと考えられる種々語り芸への推移という観点から観察してみたい。

関山師（2001）は『庶民芸能と仏教』と題し、本節で考究する内容を詳細に跡づけた一書である。第二章「説教の普及」は、仏教から庶民芸能へ展開していく道筋が系統立てて描かれている。そこでの説明によると安居院流と三井寺流が並び立っていた説教主流派のうち、三井寺派は芸能の元締めというような役回りに転じて説経浄瑠璃から説経節へと繋がっていった。この二つ以外にも「平曲・祭文・ちよんがれ・落とし噺・講釈・阿呆陀羅經などは、すべて説教の系譜と密接不離の関係をもっている」（同書54ページ）と言われている。

浄土真宗を始めとする仏教諸派の説教が庶民芸能に推移する経緯について、上掲書37～38

ページに的確な説明が施されている。長くなるが、そのまま引用する。

宗教は理屈ではなく感覚的な要素の方が重要である。学問や知識だけでは信心は得られない。その大切なことを昔の布教家は、よく心得ていた。散文的、写實的、理論的な説教よりも「情念の説教」の方が、より多く享受されたのは、情緒に生きる人間の歴史から見て至極当然のことであった。その昔、高座に登った説教師は、ことばに節をつけ、見事な声と巧妙な話し方で、歌うがごとく、語るがごとく、笑いあり、涙あり、滔々と弁じたてて、まるで善男善女を吸い込むようであった。浄瑠璃のようでもあり、講談のようでもあり、節がつくと浪花節を思わせ、笑わせれば落語であり、泣かせれば人情噺でもあった。つまり、日本の「語る芸」「話す芸」のあらゆる要素を包含した節談説教独特のあざやかな弁舌が、満堂の群参を陶醉させたのである。

ここに言及されている浄瑠璃・講談・浪花節・落語という語り芸すべてが、まさに説教から源を発しているというのは重大な指摘である。即ち、これら諸芸が受け継いだ特性——情念に訴えかける笑い・感動・情愛・哀れ——というような側面は全て説教が本来の目的として満堂の群参に語りかけてきたものである。娯楽の少ない時代にあっては説教を聴聞することが大きな楽しみであり、「神信心を止めたら、止めた者に罰が当たる」と言われるほどに日常茶飯事であった。近世に入って京坂と江戸という三都では芝居小屋や寄席・講釈小屋などが多くできたが、農村部では説教聴聞が唯一の娯楽であるという状況が根強かったことであろう。そして村々家々を巡って門付けで経文の一節を唱えたりする六部や願人坊主などによって、説教と演芸の境目にあるような芸能が形成されたものであろう。

ここで挙げられている諸芸能のうち、説教との関連が最もよく跡づけられ、先行研究も多かったのが落語であろう。説教と落語の繋がりが深い大きな要因として、安楽庵策伝和尚（天文二十三年（1554）生、寛永十九年（1642）寂）が大きな位置を占めていることが考えられる。その生涯は関山師（1990）に詳しく述べられているが、和尚は浄土宗西山派誓願寺法主まで務めた傑僧であり【醒睡笑】の著者として名高い。説教の名人であり、【醒睡笑】はそのネタ本として著されたという。つまり説教と落語の接点が、「落語の祖」とも称される策伝和尚という名人によって体现されていると言えよう。ここからは説教と語り芸との繋がりについて、まず落語を採り上げてみる。

釈師（2010）第四章には、書名の副題と同じ「落語の中の浄土真宗」という章名で以下の噺が紹介されている。

（1）宗論、お文さん、亀佐、お座参り、菊江仏壇、親子茶屋、淀川<sup>4</sup>、（寿限無）

これら演題はいずれも浄土真宗と関連が深い筋立てであり、仏教色が濃く反映されている点は上掲書での粗筋紹介でも窺い知ることができる。「宗論」においては門徒である親旦那とキリスト教に傾倒している息子が宗論を交わすという筋立てであるが、仏教とキリスト教それぞれの教義が具体的に語られるというのが大きな特徴である。「お文さん」における「お文」は連如上人が門徒に書き送った書状を指す大谷派（東本願寺）での呼び方であり、本願寺派（お西）では「御文章」と呼んでいる。これら演題が仏教色に彩られているのは、節談が浄土真宗独自

の伝道形態であることと関係づけられるであろう。

これに先立つ上掲書第三章は、仏教各宗派別に落語のネタを列挙している。後段で触れるが、「世帯念仏」「百人坊主」などは、上方ネタでの演題である。江戸ネタとしての呼称は後段で別掲する。\*印を付したのは、前田（1966）で上方落語ネタとして挙げられていないという理由で筆者が「江戸ネタ」と判断した断である。

（2）浄土宗（八） 世帯念仏<sup>5</sup>、阿弥陀池、お血脈、野崎詣り、十八檀林\*、万金丹、百人坊主<sup>6</sup>、高尾<sup>7</sup>

時宗（一） 鈴ふり

融通念仏宗（一） 片袖

法華宗（七） 鯨沢\*、甲府い\*、法華長屋\*、刀屋\*、中村仲蔵\*、堀川、法華坊主

臨濟宗（二） 餅屋問答<sup>8</sup>、近江屋丁稚

曹洞宗（三） 骨釣り<sup>9</sup>、茄子娘\*、野崎詣り

真言宗（五） 高野違い、大師の杵、大師の馬、悟り坊主、袈裟御前

天台宗（一） 鶴満寺

奈良仏教系（三） 景清、奈良名所、鹿政談

仏教一般（仏教習俗を含む、十三） 天王寺詣り、菜<sup>ながたん</sup>刀息子<sup>10</sup>、山号寺号、くやみ、片棒、仏馬\*、錦の袈裟\*、死ぬなら今、先の仏、死神、三年目、らくだ、西行鼓ヶ滝

仏教倫理（八） 鴻池の犬、松山鏡、除夜の雪、七度狐、地獄八景亡者戯、一目上がり\*、堪忍袋、五光

観音信仰（四） 景清、苦ヶ島、船徳\*、擬宝珠

僧侶を揶揄（五） 手水廻し、転失気、黄金餅\*、きらいきらい坊主、ぬの字鼠

このように、上方落語も江戸落語も広く各宗派から題材を採っていることが一目瞭然である。仏教倫理以下の三分は、広い意味での仏教関連ネタというように考えるのが妥当かもしれない。もっとも「除夜の雪」は古典ならぬ新作ながら、寺の大晦日を舞台として因縁断のような展開である。新作である故に、特定の宗派に偏らないように配慮されたものかもしれない。

上方ネタと江戸ネタという区分からは、法華宗に関連した断は江戸ネタが多いという傾向が現れている。上方と江戸では、同じネタでも演題が異なる場合がある。「世帯念仏」（上方）—「小言念仏」（江戸）、「高尾」（上方）—「反魂香」、「百人坊主」（上方）—「大山詣り」、「餅屋問答」（上方）—「菟藪問答」、「骨釣り」（上方）—「野ざらし」等である。上方ネタと江戸ネタで共通する断については、概ね上方から江戸に伝わったものが多いと考えられる。

ここで挙げた演題のうち「宗論」はキリスト教、「百人坊主」は伊勢参り、「死神」は特定宗派に関係しない死に神、「地獄八景亡者戯」は道教の影響を受けた閻魔大王というように仏教以外の宗教も関連している。「死神」は釈師（2010：86）では「グリム童話から題材をとった」と指摘されている。「鶴満寺」や「奈良名所」のように、寺や土地が舞台になっているものの仏教色が限定されるというような演題も含まれている。

上掲（2）で浄土宗と曹洞宗で重複している「野崎詣り」と奈良系仏教（北法相宗）と観音信仰双方に挙げられている「景清」をそれぞれ一つと数え、（1）で挙げた浄土真宗系の八話と合わせて六十七演題が数えられる。



他方で関山師（1991）は一冊丸ごとで仏教と落語の関わりについて述べられている。六十四演題が分類されているが、釈師（2010）とは異同が見られる。上掲（1）、（2）に挙げられていない演題は以下の通りである。

- （3）お盆、薬人形、心眼、ざんざり地藏、開帳雪隠、お見立て、幽霊飴、へっつい幽霊、不動坊、五百羅漢、位牌屋、本堂建立、狸の化け寺、羽衣、朝友、かつぎ屋、ざこ八、火中の蓮、真景累ヶ淵、怪談牡丹灯籠、怪談乳房榎

範疇としては「火中の蓮」以下が一章を設けられた怪談と人情噺における圓朝噺として採り上げられている。残りは通仏教（仏教全般）という括りである。「牡丹灯籠」に代表される怪談は、関山師（1991）が一章を割いて詳細に説教との関わりを説いている。それによると、前近代においては説教を聴聞する側にとっても幽霊の存在は今よりも身近に感じられたであろうし、譬喩因縁譚としても用い易い素材であったと言えるであろう。それを集大成したのが、本格的な活動期が近代に入ってからという三遊亭圓朝師（天保十年（1832）生、明治三十三年（1900）寂）である。講談のように続き読みをする長尺の噺であり、笑いよりも演者の語り口で聞かせると考えるべきであろう。陽気で笑いを旨とする上方落語には、ついぞ移される要素がないと考えられる。米朝師（2014：151）は「五光」という噺のマクラで、次のように述べている。

大体この関西の落語には、本当の怪談噺というのはあんまりございませんな。東京の「牡丹燈籠」や「真景累ヶ淵」というような、ああいう凄味のある人情噺があったものというのは、あんまりないでございませぬ。初め、怖い噺かいなどと思てると、後、あほみたいなことになるというのが、このこっちの落語の特徴でございまして……

角岡（2013）では上方落語演題433を芝居噺・人情噺・怪談・滑稽噺という範疇に分類し、更に滑稽噺で細分化を試みた。滑稽噺の下位分類として、《仏教》という括りで次の十五演題を纏めていた。同書は上方落語のネタを範疇別に、オチなし・地口・考えオチ（地口オチ以外を広い意味での考えオチとして括った）と分類した。

- （4）【考えオチ】（八） 寿限無、茶漬えんま、淀川、不精の代参、指南書、八五郎坊主、餅屋問答、宗論  
【地口オチ】（六） お文さん、大仏の目、烏屋坊主、亀佐、天王寺詣り、ぬの字鼠  
【オチなし】（一） 世帯念仏

同書では「宗論」を「オチなし」と分類していたが、今回「上方落語覚え書き」というインターネット・ホームページ（<http://homepage3.nifty.com/rakugo/kamigata/index1.htm>）で確認したところ次のようなサゲになっていた。「番頭さん、あんたも真宗か」「いいえ、仲裁は時の氏神でございませぬ」。そこで今回は考えオチに分類し直した。

（4）と上掲（2）と比べると、（4）の方が挙げられているネタ数が少ない。一つには、（2）には江戸ネタも含まれているという事情がある。また（2）は広い意味で仏教的要素が

織り込まれているネタを集めているのに対し、(4)では仏教的要素が中心になっているという基準を適用しているからでもある。ここで挙げたネタはどれも、節談の五段法で言えば譬喩や因縁談としてそのまま使えそうなものばかりである。例えば「八五郎坊主」というのは、身より頼りのない八五郎という男が秋の一日思い立って出家をする噺である。また「天王寺詣り」は彼岸の中日に亡き愛犬の供養をしようとして四天王寺に参詣して引導鐘を撞いてもらうという筋立てである。戒名書きの場面では「靈巖貴鄭信士」というような戒名も登場する。小野小町が「人間は風前の灯火、明日をも知れぬ身の終わりかな」と言い、一休禪師が「今も知れぬ身の終わりかな」、親鸞聖人が「明日ありと思う心の仇桜、夜半に嵐の吹かぬものかは、ただ南無阿弥陀仏」と並べ立てて一節は、説教をそのまま引き写してきたかのようなようである（「上方落語覚え書き」、表記を一部改変した）。仏教色が全面に溢れていると言えるであろう。

禪宗における問答に取材した噺が「餅屋問答」である。上掲(2)では臨濟宗と分類されているが、噺で「越前永平寺」と称しているからには曹洞宗に分類するべきであろう。噺の中で、越前永平寺修行の僧である沙弥沢善と餅屋のおやっさん扮する大和尚との間で次のような問答が展開される（「上方落語覚え書き」）。

- ・法華経五字の説法は八編に閉じ、松風の二道は松に声あるや、また松に風を生まんや、この儀や如何に。
- ・有無の二道は、禪家五道の悟りとし、いずれが理なりや非なりや。

ここで餅屋のおやっさん扮する大和尚は無言の行を装い、返答をしない。仕儀なしに沢善は、仕草での問答に切り替える。次のような仕草であるが、奇数番は沢善が問いかけるもので偶数番は大和尚の返答である。

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| 一. 胸の前で手で小さな輪を作る | 二. 両腕を頭の上に、大きな輪を作る |
| 三. 両手指十本を突き出す    | 四. 片手指五本を突き出す      |
| 五. 三本の指を突き出す     | 六. 目の下を指差す         |

この問答を通して、沢善は「自分が負けた」と勝手に解釈して寺を退散する。餅屋のおやっさんは教義の問答とは知らないままに、「相手は自分が餅屋の親父だと勘づいている」と思って仕草で応答していたのが結果的に「問答に勝った」というのがサゲになっている。この仕草が意味していた内容を、左に沢善の解釈—右に餅屋のおやっさんというように対比させると次のようである。

- |              |                             |
|--------------|-----------------------------|
| 一. 師の心中、お心は  | —— 「お前とこの鏡餅、これぐらいやろ」        |
| 二. 大海の如く広し   | —— 「なんかしてけつかんねん、これぐらい大きいわい」 |
| 三. 十方世界は     | —— 「十でなんぼや」                 |
| 四. 五戒にて保つ    | —— 「五百や」                    |
| 五. 三尊の弥陀は    | —— 「三百に負けてくれ」               |
| 六. 和尚の目の下にあり | —— 「あっかんべー」                 |

この噺が面白いのは、禅宗の問答を沢善が仕草に表現しているところを餅屋のおやっさんが見事に自分の商売に即して解釈して仕草で返しているという点にあらう。「べかこ」(あかんべー)という仕草で落としているのも他の噺に類例を見ないが、禅宗の教義がぴったりと餅屋との駆け引きに引き合わされている点に限りない面白みが潜んでいると言える。このように禅宗の核心に迫るような内容を孕みながら巧みに笑いに昇華させている意味で、信心と笑いの稀に見る融合と言えそうである。

ここで、(4)で挙げていないが角岡(2013)では他の範疇に括った仏教に根ざす噺を示しておく。各演題を、その範疇で括ったかを「商い、盗人、根問物」などと表示しておく。

- (5)「近江屋丁稚」「片棒」—商い、「お血脈」—盗人、「浮世根問い」—根問い、「親子茶屋」—茶屋、「片袖」「死ぬなら今」「堪忍袋」—怪談、「堀川」—酒、「法華坊主」—動物、「袈裟御前」「西行鼓ヶ滝」—講釈、「くやみ」—長屋、「七度狐」「地獄八景亡者戯」—旅

同書での分類は、種々の要素が入り組んでいる噺の中で最も際立った特色をもって挙げているのに過ぎない。例えば「地獄八景亡者戯」は旅ネタというのが伝統的な分類であるが、多くの亡者が登場して地獄を巡るという筋立てにおいて仏教色の濃い噺である。閻魔大王が登場するという点では、道教の影響が見られるという点は以前に指摘した。「七度狐」では、仇をされた狐が旅人を騙し、旅人二人が山中の尼寺に夜半に迷い込むという舞台設定になっている。「地獄八景」と同様、伝統的に旅ネタと分類される。広い意味合いで仏教の影響が認められるという観点からは、上掲(2)のようにできる限り多くの噺を分類しておくのが好ましいであろう。このように仏教の考え方が生活全般に広く深く浸透していた様子が、ネタの広がり方から覗えるように思われるのである。

落語に次いで仏教や説教に関連が深い分野としては、関山師(2004)第二章第三節で中将姫が詳しく述べられている。中将姫は大和国当麻寺に伝わる蓮糸曼荼羅によって、浄瑠璃や歌舞伎の主人公として採り上げられてきた。まずは世阿弥の時代に謡曲【当麻】ができ、続けて【雲雀山】では「継子もの謡曲」の代表作となった(同書、102ページ)。浄土宗の当麻曼荼羅講説によって、中将姫伝説は世に広く知られるようになったという。浄瑠璃に登場したのは時代が下って元禄期で【当麻中将姫】に始まり、【中将姫曼荼羅】が続く。【鶴山姫捨松】は「中将姫の雪責」で知られ、【当麻中将まんだらの由来】【中将姫京雉】【中将姫雲雀山】【中将姫】【けいせいみかえり願本尊】など続々と上演されていった。大坂で人気を博す始まりとなったのが寛政九年(1797)の【中将姫古跡松】であったという(上掲書104～105ページ)。人気は明治以降も衰えず、【中将姫当麻縁起】【雲雀山駒絆松樹】【雲雀山照日物語】【中将姫】など改作ものが続いた。このように中将姫ものは長い間、浄瑠璃や歌舞伎を中心として芸能の中に深く取り込まれ、民衆の間に広く馴染んでいたのである。その下地には、説教で因縁談として度々語られるという状況があったのである。

能について述べる。釈師(2010:14～15)には、能「誓願寺」が紹介されている。この誓願寺とは、策伝和尚が法主となった浄土宗西山深草派総本山である。この能には、時宗の宗祖である一遍上人と和泉式部の亡霊が登場するという。一遍上人が誓願寺を訪れて名号が書かれたお札を配っていると、和泉式部の亡霊が「誓願寺の額には寺号が書いてありますが、それを

南無阿弥陀仏の六字名号に書き換えてください」と願い出た。一遍上人がその通りになさると和泉式部は歌舞の菩薩となって舞うというのが筋立てである。第一場第三段には「往生なれや何事も、皆うち捨てて南無阿弥陀仏と称ふれば、仏もわれもなかりけり。仏もわれもなかりけり。南無阿弥陀仏の声ばかり。至誠心深心廻向発願の鐘の声…」と謡われる。この部分だけ取り出してみると、芸能と言うよりも宗教そのものと言える。この能を蓮如上人がお気に入りであったというから、時代的には策伝和尚の頃よりも百年以上遡る。

落語に比べて講談は文字として残っている資料が少ない。この事情について旭堂南海師は「講談は時代も人物名も実録であるので、江戸時代は出版する事は御法度でした」と述べている。写本で伝わっていく内に内容が改変され、例えば『難波戦記』では家康が鉄砲で討ち取られるとまで脚色されたという。京大坂という上方では太閤品貞という土地柄によって、そのような改変も拍手喝采で受け容れられたのであろう。

## 5. 結び

ここまでで仏教の説教が日本の語り話芸の源流である事、特に真宗の節談が近世以降の説教においては大きな位置を占めてきた事を概観してきた。説教から派生した話芸は多いが、中でも落語が仏教との関係が最も深そうである。それは、文献の多さによっても裏付けられる。関山師（1992：28）が指摘しているように、「前近代のわが国では、宗教・生活・娯楽（芸能）は一体であったので、説教（談義）には常に娯楽性が含まれていた」という視点は重要である。そういう視座から眺めれば、宗教と語り芸の距離が大きくなってしまった現代が不幸な時代のようにも思われる。また関山師（1991：13）が、節談による説教を「説教話芸」と名付けておられるのも順当である。

江戸時代には落語は京坂と江戸という三都においてのみ定席が設けられていた演芸である。それに対して説教は、全国津々浦々の寺院で場が設けられていた事であろう。ネタの伝播という観点からは、例えば落語から説教にネタを採り入れた場合に三都で演じられていたような内容をそのまま語ったものか、あるいは聴聞者に合わせて語り口を変えたのかというような辺りに興味を持つ。これも今後における課題の一つとして残しておく。

些か論理が飛躍するかもしれないが、ここで本稿において論じた節談と角岡（2010）で考察した法要等における経文の漢文音読を関連づけて考えてみたい。節談が盛んで説教が身近であった時代というのは仏教が暮らしに溶け込み、教えに日々接しているような「素朴な」暮らし方であったのではないだろうか。それ故に葬儀や法要での経文を漢文音読する以上に、説教のようにより平易な言葉によって教義を身近に感じていたことであろう。それは教義を理屈として捉えるというよりも、耳から入る「ことば」としてストンと信心に納まったのではないだろうか。聴聞者の心に響くように磨き上げてきた話芸が、無かし情念に訴えかけてきたであろう。そして讃題に経文の一節が取り込まれているとすれば、自ずからお経は馴染みのある存在になったと思われる。節談が下火になって説教などに接する機会が減ったために、相対的に意味が察しにくい経文の漢文音読しか仏教と触れる機会がなくなってしまった——必然的に、日々接する教えが抽象的になっていったのではあるまいか。例えば『観無量寿経』冒頭で説かれる阿闍世王子と韋提希夫人と頻婆娑羅王の物語など、浄土三部経でも最も波乱に富んでいるので、神田唯憲師が採り上げたという記録が残っている（直林師（2014：78））。経文の中身や

内容を説教で知っていれば、自ずとお経にも親しみが湧くであろう。経文を漢文音読で耳にしても、ある程度の察しが付いていたのではなかろうか。これは甚だ雑駁な推論であり、客観的な検証も難しいかもしれない。しかし今後の課題として、この方向で論考を深めてみたい所である。

## 註

- 
- ・ 本研究は2015年度、財団法人本願寺派教学助成財団教学研究資金の助成を受けています。研究課題：節談の研究。
  - \*1 谷口師（2004：19）では「結勸」と表記されている。
  - \*2 原著では神田唯憲師の布教日誌に残された番号が附され、師である木村徹量師の『信疑決判』を参照している旨も言及されている。ここでは、その番号等を省略する。
  - \*3 「合法」は釈師（2010：37）で「仏法へと話を導く」と説明されている。
  - \*4 上方ネタでは「淀川」と称されているこの演題は、江戸落語では「後生鱈」と称している。淀川というのは地名ではなく、客の眼前で魚を捌くという形態の魚屋の店名から採ったとされている（『上方落語覚え書き』速記中での説明による）。
  - \*5 上方ネタ「世帯念仏」は、江戸ネタとしては「小言念仏」である。
  - \*6 原著では「百八坊主」となっていたが、著者の釈師に確認したところ、「百人坊主」が正しいとの旨であった。よってここでは本来の演題を掲げておく。江戸ネタでは「大山詣り」と題して演じられることが多い。
  - \*7 上方ネタ「高尾」は、江戸ネタでは「反魂香」である。高尾は嘶に登場する元太夫の名であり、「反魂香を焚くと亡き高尾の姿が現れる」という筋立てである。
  - \*8 原著では「こんにゃく問答」という演題にしてあるが、これは江戸ネタでの呼称である。上方では「餅屋問答」というネタであり、江戸ネタとは大和尚に扮する男の商売が異なるために演題も異なる。
  - \*9 原著では「野ざらし」という演題であるが、上方では「骨釣り」と称されている。「餅屋問答」―「蒟蒻問答」とは異なり、上方ネタも江戸ネタもほぼ同じ筋立てである。
  - \*10 「菜刀息子」は別名「弱法師」とも呼ばれる。これは能の「弱法師」と人形浄瑠璃の「摂州合邦辻」に着想を得ていることに由来する。角岡（2013：55）では人情嘶と分類し、粗筋とサゲを紹介している。前田（1966：240）では「別称弱法師は四代日桂米団治の改題」としている。

## 参考文献

- 柏原祐義（編）（1935）『真宗聖典』京都：法蔵館。
- 桂米朝（2014）『米朝落語全集第三巻』増補改訂版。大阪：創元社。
- 角岡賢一（2003）「一般語彙として流通する仏教用語の考察」『龍谷紀要』第25巻第1号。pp. 17-35.
- 角岡賢一（2004）「新聞記事データベースに見られる仏教用語」『龍谷紀要』第26巻第1号。

- pp. 35-54.
- 角岡賢一 (2006) 「仏教語彙受容史研究序説」『龍谷紀要』第28巻第1号。pp. 77-94.
- 角岡賢一 (2008) 「仏教語彙意味変化の新聞記事データベースによる追跡」『龍谷紀要』第29巻第2号。pp. 169-189.
- 角岡賢一 (2010) 「仏教思想普及のための言語学的試み」『龍谷大学国際センター研究年報』第19巻。pp. 49-62.
- 角岡賢一 (2013) 「上方落語演題の意味的分類」『龍谷大学国際センター研究年報』第23巻。pp. 49-69.
- 角岡賢一 (2014) 「落語「くっしゃみ講釈」における話芸語り口の音響分析」『龍谷紀要』第35巻第二号。pp. 21-47.
- 旭堂南海 (2014) 「古典を現代に活かす技法」『節談説教』第十二号、pp. 1-21.
- 釈徹宗 (2010) 『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 釈徹宗 (2013) 「隘路を行く者」『節談説教』第十一号。
- 浄土真宗教学研究所 (編) (1996) 『浄土三部経 (現代語訳)』京都：本願寺出版社。
- 関山和夫 (1990) 『安楽庵策伝和尚の生涯』京都：法蔵館。
- 関山和夫 (1991) 『落語風俗帳』東京：白水社。
- 関山和夫 (1992) 『落語名人伝』東京：白水社。
- 関山和夫 (2001) 『庶民芸能と仏教』東京：大蔵出版。
- 祖父江省念 (2014/1985) 『節談説教七十年』京都：方丈堂。
- 谷口幸璽 (2004) 『「節談」はよみがえる』京都：白馬社。
- 直林不退 (2010) 「説教の歴史と節談」『節談説教』第五号。
- 直林不退 (2014) 『名人木村徹量の承継者 神田唯憲の節談』八王子：節談説教研究会。
- 府越義博 (2010) 「説教台本作成法」『節談説教』第六号、pp. 37-49.
- 戸次公正 (2001) 『正信偈のこころ 限りなきいのちの詩』京都：法蔵館。
- 戸次公正 (2003) 『阿弥陀経が聞こえてくる いのちの原風景』京都：法蔵館。
- 戸次公正 (2009) 『日本語で読むお経をつくった僧侶の物語』東京：明石書店。
- 戸次公正 (2010) 『意味不明でありがたいのか——お経は日本語で』東京：祥伝社。
- 前田勇 (1966) 『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。